

【書評・紹介】

桑山敬己著『ネイティブの人類学と民俗学—知の世界システムと日本』

(東京, 弘文堂, 2008年, 294+42頁, 4,200円+税)

沢尻 歩

はじめに

本書は 2004 年に刊行された *Native Anthropology: The Japanese Challenge to Western Academic Hegemony*, Melbourne: Trans Pacific Press (『ネイティブの人類学—西洋の学問的覇権に対する日本の挑戦』) の日本語版である。この題名から伺えるように、本書で扱われているテーマは学問的なシステムの問題である。もちろん人類学の理論も取り上げられているのだが、おそらく本書の注目すべき特徴は、議論がフィールドワークに裏づけられた実証的なものだという点にある。

著者の経歴は「エピローグ」に詳述されているが、著者はアメリカの大学に留学、就職し、十年以上アメリカで生活した後、日本へ居を移した。この経験は、アメリカでは *Japanese* という他者であり、日本では日本におけるキャリアのない他者であったということの意味する。本書の議論を豊かなものにしてしているのは、他者として二つの国の学問世界に身を置いた著者自身の経験である。

では、そうした著者の問題意識はどこに向けられているのだろうか。学問的なシステムを問題視していることは既に述べたが、より具体的に言えば、本書を通じて問題化されているのは人類学における表象の問題である。特に、「人類学の世界システム」においてネイティブによる自文化表象は周辺化され、中心に届かないという問題に焦点が当てられている。ここで言う「人類学の世界システム」とは、人類学という学問分野での英米仏の三国を中心、それ以外の国を周辺とする世界システムのことであり、中心と周辺の間では知識生産をする上で力の不均衡が生じるとするものである。また、ネイティブとは従来の人類学では西洋の中心から遠く離れた辺境に住む人間のことを意味したが、本書においては人類学的研究の対象となる人々すべてを意味する。つまり本書の指摘する問題とは、人類学的知識の生産の場では英米仏による表象が支配的であり、当事者による自文化表象が軽視されているということなのである。

このような問題を著者は現代における人類学の課題として捉え、それを乗り越えるための処方箋を提示している。その処方箋とは、特定の語りに特権を認めず、描く側と描かれる側はもちろん、研究対象の文化に関心を寄せるすべての人に「対話空間 (dialogic space)」を設けることである。

本書の構成

本書の構成は全 8 章の三部構成である。全体の論旨や構成は、計 12 ページの「序」に本書の成立過程とともに述べられているので、そちらを参照していただきたい。ここでは別の視点から各章および全体の内容を紹介したい。その別の視点とは、著者にとって最大の主張と言え



表紙画像

るだろう「対話空間」の形成を念頭に置いて、その主張と各章の論旨との関連を探るものである。

本書は第一部「知の世界システム」、第二部「文化人類学と民俗学」、第三部「日本の表象」の三部によって構成されている。先に述べた視点から読むと、これらはそれぞれ以下のように解釈できる。第一部は現状分析であり、上述の人類学における表象の問題がどのような背景によって生じているかが明らかにされている。そして、その問題を解決するためには、対話空間を設けることが必要だと主張されている。第二部では、実際に対話空間を形成するための方法について、特定の学問分野でどのような対策を講じるべきかが論じられている。ここで著者は、柳田国男によって創設された日本民俗学を検討し、それを鏡として人類学のあり方を再考するように迫っている。第三部では、第二部に引き続き方法論についての議論がなされている。第二部では特定の学問分野のあり方に焦点が当てられていたが、第三部では世界システムの中心であるアメリカと周辺である日本との関係に焦点が当てられている。そして、アメリカにおける日本の表象を検討し、ネイティブとしての日本人が「対話」のパートナーとなる方法を模索しているのである。以下では章ごとにその内容を要約し、紹介していくこととする。

第一部 知の世界システム

第1章 総論—ネイティブの人類学の射程

第1章は本書の縮図とも言える章であり、著者自身も「序」の中で「私の考えをもっとも簡潔に表している」としている。この章ではまず、ポストコロニアルな状況を呈す現代世界におけるネイティブの人類学の意義について述べられている。ネイティブの人類学とは、調査者としての西洋人と被調査者あるいは協力者としてのネイティブという二項対立が崩れた結果生まれた、ネイティブ自身が自文化や自民族について自らの言葉で語る試みのことである。

著者はネイティブの人類学を人類学の知的構造を変える可能性を持つものとして位置づけている。そして、それを論証するための枠組みが、著者の提唱する「民族誌の三者構造」である。これは、民族誌を「書く」ことと「読む」ことに注目した「ライティング・カルチャー」の議論をさらに一歩進めたもので、「描かれる者」としてのネイティブについての考察や、従来「読む者」として想定されていた「書く者」と同じ言語文化共同体に属する人々の他に、ネイティブやネイティブの人類学者、さらには書く側にも描かれる側にも属さない第三者も加えて考察したものである。つまり、これまでの人類学にネイティブの存在を考慮することで、民族誌の幅が格段に広がるということである。

「民族誌の三者構造」を考慮すれば、一つの書き上げられた民族誌に様々な人が関与しうることが明らかになる。著者の主張は、彼らの間に平等な立場で「対話空間」を設けるべきだということである。だが、そこに立ちほだかるのが、前述した「人類学の世界システム」における中心と周辺の力の差である。このような現状があるからこそ、いかに「人類学の世界システム」を変革して、「対話空間」を形成するかが現代的な課題となるのである。

第2章 ネイティブの人類学者—内外の日本研究者を中心に

この章では、第1章で触れたネイティブという概念やネイティブの人類学について、より詳細な説明を行っている。前者については、マリノフスキーなど人類学の主要人物の著作を事例として検討し、後者については、日本の人類学者とアメリカの人類学的日本研究者との関係を事例に検討している。

また、「対話空間」を設けるべきだという著者の主張も、より具体的な形で提示されている。それは著者が「オープン・テキスト (open text)」と呼ぶもので、ある書き手のテキストに様々な人が書き込むことを促し、書く者と描かれる者による「共著」や、複数の書き手による「複著」を許すものである。著者は、インターネットなどのメディアを利用することで、「オープン・テキスト」という形の対話が可能になると主張している。

第3章 人類学の世界システム—世界の人類学的共同体における日本とアジア

第3章は、本書の基となった著者の論文に対するファン＝ブレイメンらの批判に応える形で書かれたものである。その批判の多くは、人類学の世界システムという概念に向けられたものであった。具体的に言えば、一つは著者の考えが「西洋」対「非西洋」という二項対立に基づく静的なものであるという批判であり、もう一つは日本の人類学は著者が言うほど周辺的ではないというものであった。著者はこれらの批判に対して一定の妥当性を認め、中心や周辺の中にも多様性があることを論じている。その一方で著者が強調しているのは、人類学の世界システムという概念は、世界の人類学的実践に見られる力の不均衡を浮き彫りにするために有効であるということであり、読者はそれに起因する問題に自覚的になる必要があるという主張であった。

第二部 文化人類学と民俗学

第4章 柳田国男の「世界民俗学」再考

第二部では、柳田国男によって創設された日本民俗学が取り上げられている。著者によれば、ネイティブの人類学が現在抱えている問題の多くは、1930年代に柳田が既に論じたものであったという。本章では柳田のテキスト、特に『民間伝承論』の検討が行われている。

柳田の民俗学の特徴の一つは、一国民俗学から世界民俗学へという構想にある。著者の解釈に従えば、世界民俗学とは一国民俗学を構成要素とするものであり、世界の民俗文化をそれぞれの国で研究し、その成果を世界的な規模で比較総合しようとする試みである。著者は、柳田の構想の背景には、民俗文化の奥深いところは外国人にはわからないという確信があったと指摘する。換言すれば、民俗はネイティブにしか理解できないとする主張である。著者はこれを世界民俗学の最大の問題点と批判しつつも、柳田の世界民俗学の構想自体は、今から70年以上も前のものでありながら、「対話空間」の形成を目指した点で評価されるとしている。

第5章 日本民俗学の脱国民（脱土着）化にむけて

本章は「柳田國男の会」の報告集に掲載された論文を基にしたものであり、人類学者の著者が日本民俗学について書いたものである。内容としては、一国内に閉ざされがちな民俗学を、どのように世界に向けて開いていくべきかが、知の世界システムとの関連で述べられている。だが、この章にはそれ以外の論点や主張も含まれている。例えば、人類学者にとっては、著者の議論は民俗学を鏡として異文化間の「対話空間」について考える契機となるであろうし、民俗学者が後述の第7章で論じられている「逆さ読み」をするなら、人類学についての議論になるかもしれない。そのような意味で、本章は読者の解釈によって人類学と民俗学の双方のあり方を再考する機会を提供していると言えるだろう。

第6章 人類学的フィールドワーク再考—日本民俗学を鏡として

フィールドワークは人類学の基礎であるが、本章では民俗学者の「フィールドワークをフィールドワーク」した著者の経験に基づいて、人類学的実践に再考を迫っている。そして、民俗学者の調査方法を人類学者も取り入れるべきだと主張している。著者は民俗学的調査の特徴として、(1) 短期間の滞在を数回繰り返す「旅」の感覚での調査、(2) 複数の研究者による共同調査、(3) 現地の知識人の協力を得ての調査、の三点をあげている。ここで強調されているのは、主に国内を研究する民俗学者が意識せざるをえない調査対象のまなざしに、人類学者はもっと敏感になるべきだということである。そのことは、とりもなおさず「民族誌の三者構造」を意識することの重要性、つまり人類学的フィールドワークにおいても、「書く者」、「描かれる者」、「読む者」の三者の存在を念頭に置いて、調査を進めるべきだという指摘につながる。

第三部 日本の表象

第7章 民族誌の逆さ読み—アメリカ人論としての『菊と刀』

ここで取り上げるのは、アメリカにおける日本文化論の古典ルース・ベネディクトの『菊と刀』である。周知のように、ベネディクトはアメリカ人と日本人を対置して語ったため、『菊と刀』はアメリカ人による日本人論として読めるばかりでなく、日本を鏡としたアメリカ人論としても読めるのである。著者はこのような読み方を「民族誌の逆さ読み」と呼ぶ。つまり、民族誌に描かれた側が、描いた側を逆照射する試みである。

著者はこうした読み方には困難がつきまとうことを認めながらも、そこに大きな意義を見出している。なぜなら、調査され描かれたネイティブが「口出し」できない従来の民族誌にあって、「民族誌の逆さ読み」は書く者と描かれた者が、平等な対話のパートナーとなる機会を提供するからだ。著者がここで求めているのは、民族誌を書き上げた時点で人類学者の仕事を終わらせないことだ。つまり、著者が『菊と刀』の「逆さ読み」によって例証したように、ある民族誌を出発点として、書く側と描かれた側が双方の文化について書き、いわば「書き返し」を繰り返すことによって対話を続け、真の知的交流を行おうということである。

第8章 アメリカの教科書の中の日本—写真とテキスト

最終章の本章は、アメリカで使われている人類学の教科書で、日本がどのように表象されているかを分析したものである。著者によれば、教科書は学会で大方の支持を得た見解を載せたもので、学生への影響力が予想以上に強いという。つまり、教科書における日本の表象は、アメリカにおける日本の表象の主要な一部とみなすことができる。

分析は教科書のテキスト（本文）と写真の二点を対象に行われた。その結果、日本の表象には様々な問題があることが判明し、代表的なものとしては、着物の「統計的意義」は低い（＝実際にはあまり見かけない）のに、「象徴的意義」は高い（＝日本文化の象徴として扱われている）という事実である。換言すれば、着物は当該集団（日本人）の認識からすれば、不釣り合いなほどの大きな価値が付与されており、実際の頻度に基づいて表象されていないということである。

ここで多少過度になることを恐れず解釈をすると、本章には人類学において日本がアメリカと対話空間を形成するための材料が揃えられている。先に、第3章では人類学の世界システムにおける周辺の多様性が指摘されていると述べたが、その中でインドは周辺の声を中心に届けることに成功した好例として紹介されている。著者はこのことを植民地化の肯定的側面の一つ

と評している。つまり、インドのエリートは英語での教育やイギリス式の教育を受けたため、宗主国との間に「奇妙な親交」とでも言うべき知的ネットワークが生まれたというのである。植民地化を正当化するわけではないが、日本とアメリカの間にも同様の知的ネットワークができれば、「民族誌の逆さ読み」および対話空間の形成は促進されるだろう。そして、本章のような分析を進めていけば、真の知的交流も現実のものとなるであろう。

おわりに

最後に筆者の全体的な感想を述べると、本書は日本人にとっての「ホーム＝日本」を扱っているため、多少の誤解が読者の間に生じるかもしれない。一つは、本書の議論の対象が日米両国における人類学というスケールの大きいものなので、より身近な問題には適用しづらいのではないかという誤解である。だが、著者の主張は民族誌の三者構造に自覚的になり、対話空間を形成することにある。書く側、描かれる側、読む側という三者関係の捉え直しを求める本書の議論は、すべての人類学者に対して自分自身の調査対象との関係に反省を求めるものである。

もう一つの誤解というより懸念は、「自国の話題」という本書の特徴が、読み手に必要以上の感情移入を起こさせ、論旨を見失わせるのではないかという可能性である。つまり、読者にとっては自分自身に関わることが批判的に論じられているため、必要以上に反感や不快感を覚え、全体の主張を見落としてしまうのではないかという恐れである。そうだとすれば、それはおそらくこれまで「読む側」に置かれていた読者が、「描かれる側」に回ったため生じる反応であろう。逆説的ではあるが、もしこうした誤解や懸念が読者にあるとしたら、著者の意図は正確に伝わったのかもしれない。なぜなら、ネイティブの人類学の本質は、描かれる者の立場から従来の知の構造を再考することにあるからだ。

(さわじり・あゆむ／北海道大学大学院文学研究科 修士課程)